

彼方ちゃんが好きって  
君が言うから付き合っ  
たんだよ？

裏面が下駄

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

近江彼方の事が好きな蒼山風（あおやま なぎ）は、しずくに相談を持ちかけ告白を試みる。成功し付き合うものの日に日に彼方の様子がおかしくなっていく。

彼方メインのヤンデレを書いていきたいです。

下手な文ですが見て頂けると幸いです。

# 目次

第三話	第二話	第一話
17	8	1



## 第一話

とあるファミレスで、目の前にいる茶髪に赤い大きなリボンをつけた少女に話しかける。

「俺さ、近江先輩に告白しようと思うんだ」

「ぶうつつー」

目の前の少女は今まさに喉に流し込もうとした飲み物を俺の顔めがけて盛大に吹き出した。

「ちよつ、何すんだよ!」

「ゲツホゲツホ、いや、ゲツホ、何すんだじゃないでしょ!突然すぎて気管に入っちゃったじゃない!」

言い終えると少女は再びむせていた。そんなに驚くことかと考えながら、少女が落ちて着くのを待つ。

目の前にいる少女は桜坂しずく。お互い家が近く、学年も同じであることから幼少期から今に至るまでの腐れ縁である。

今日もお互いの両親が仕事で遅いこともあり、こうして近所のファミレスに晩御飯を食べに来ているのである。

「で、彼方さんに何するって?」

やっと落ち着きを取り戻したしずくは、興味津々で顔を近づけてくる。

「だから、告白したいなあーなんて。いやっ近いって!」

近づいてきた顔を手で押さえながら抑制する。

「風くんが!?あの女の店員さんに営業スマイルされただけで「俺の事好きなんかなあ」とか言ってた風くんが!」

そう言うとしずくは先程とは打って変わりケラケラ笑い出した。やめてくれ、黒歴史を思い出させないでくれ。

ひとしきり笑い終わると満足したのだろう、ちゃんと俺の話を聞く姿勢になった。

「それで、彼方さんのどこに惹かれたの?」

「家族のためにバイトを掛け持ちする優しいとこや、スクールアイドルに一生懸命なところかな」

近江彼方先輩。虹ヶ咲学園に通うライフデザイン学科の3年生。そして虹ヶ咲学園スクールアイドル同好会の一人でもある。

おっとりとした性格でいつも眠そうにしている。

そしてなぜかしずくも同好会のメンバーでもある。見てくれは凄くいいのだが中身は頑固で意地っ張りである。

でもまあ、おかげで近江先輩と知り合えることが出来ているのでそこは感謝しないといけない。

「それでどうやって告白したらいいと思う?」

「んー、彼方さんかあー…難しいなあ。今言つてた事をそのままぶつけてみるとか?」  
「やっぱそれしかないよなあー」

普段使わない脳をフル回転させても、特に何もいいアイデアが思い浮かばない。

「彼方さんって校内でもすごく人気で、狙ってる人も多みたいだよ?」

「ごふう…! やっぱそうだよなく。俺なんか告白したところで鼻で笑われて、「どの分際でそんな事が言えるの?」とか言われて終わるんだろうな…」

「さ、流石に彼方さんはそんな事言わないと思うけど…でも難易度は高いだろうね。」

「じゃあどうしろってんだよ…」

「そんなお困りな君に特別にいい事を教えてあげましょう!」

「!?!」

俺は勢いよく顔を上げしずくを見る。何か秘策があるのかと期待しつつしずくが発する言葉を待つ。

「そ・れ・は！私と付き合う事です！」

「…は？」

「だーかーら」

「いるじゃん！そんな高嶺の花を狙わなくてもほら！目の前に！こーんなに可愛い幼馴染が！！」

そう言いながらあざとさ全開のウインクを飛ばしてくる。

ウインク全然出来てないし、左目もつられてつぶってるし。くそ、可愛い。不覚にもそう思ってしまった。

「いやいや、絶対ないから！…今更そんな目で見れるかっての！」

「……」

「…やだなあ！風くん！冗談に決まってるじゃん！」

「は?!そ、そんなこと分かってたし！」

「はい嘘、真に受けちゃって耳真っ赤だよ？」

ケラケラと笑い飛ばすしずく。

「ま、当たって砕けてみなさいな！」

そう言うのと立ち上がりレジの方に歩いて行った。



次の日、俺は近江先輩に告白するため屋上で告白の練習をしていた。

「近江先輩、貴女の優しくしてどんなことに対しても一生懸命なところに惹かれました。付き合ってください！」

んー、違うな。もうちよい具体的に言った方がいいか…

「おーい、蒼山くん？」

いや、まず優しいってなんだ…？考えるほど意味が分からなくなってくる。

「蒼山風くくん？」

「もう！さつきからなんですか！今忙し…いんだ…」

「こ、こ、近江先輩！なんでここに!?!」

「やつほく彼方ちゃんだよ。さつき蒼山くんが見えて驚かそうとしたんだけど…そのね、全部聞こえちゃった。えへへ」

「……」

え？聞かれてた？今の？全部？

顔がトマトの様に真っ赤になるのが自分でもわかる。

「ごめんなさい！なんでもないです！忘れてください！」

この場から早く逃げ去りたく、早口言葉のように言い残し走って屋上の扉を目指す。

ガチャリ

何か嫌な音が扉から聞こえる。まさか?! と思いつつも扉を思いっきり押してみる。開かない。

誰だよ! 今鍵閉めた奴!

「っ! 待って!」

近江先輩も近付いてくる。開かない焦りと聞かれた羞恥心から頭がパニックになる。もうヤケだ。後はなる様になれ!

くると扉を背を向けると近江先輩に向かって叫ぶ。

「近江先輩! 優しくして笑顔が素敵で、スクールアイドルに一生懸命な姿に惚れました! おっとりしてるのに裏では努力してる姿がかっこいいです! そんな近江先輩が好きです! 付き合ってください!」

言い切った…! ダメならダメだった時だ!

「…! 実はね、彼方ちゃんね、しずくちゃんが蒼山くんのことよく話してたの聞いてたんだあ」

それで少しだけ気になってたんだ♪

彼方ちゃんできれければよろしくね? 風くん♪」

「…え? 告白受けてくれるんですか…?」

「うん♪でも彼方ちゃん、独占欲がかなり強いけどいいの?」

「全然問題ないです!ありがとうございます!すっごく嬉しいです!」

「言質取ったからね?」

何か近江先輩が言った気がしたが嬉しさのあまり聞き取ることができなかつた。

晴れて俺と近江先輩は恋人になった。

しかし近江彼方の本性をこの時はまだ知る由もなかつた。

## 第二話

ガチャ

扉が開き中から満面の笑みのしずくが出てきた。

「おめでとう風くん！彼方先輩！」

「おまつ！盗み聞きしてたのかよ！っていうか鍵閉めたのお前かよっ！」

「だって風くんがいくじなしなんだもん！それより私のおかげで付き合えた様なものでしょ？感謝の言葉1つ2つあってもいいんじゃない？」

左手を腰に当てながらドヤ顔でピシツと右手の人差し指を俺に突き出す。

悔しい。しずくの思惑通りに事が進んでしまった。

「…ありがとうございます」

「えー？なんてー？聞こえないんだけどー？」

絶対嘘だ。聞こえてて楽しみやがってる。

あのしずくのニヤニヤした顔！腹立つわあ、うざっ！

「…ねえ？ 風くん？ 付き合って早々浮気してるの？」

背中に寒気が走る。…え？ 今の声って近江先輩？ 聞いた事ない声の低さだったんだけど…

恐る恐る振り返る。

近江先輩の目に光が灯っていないかった。

「つち、違いますよ！ いつもしずくとはこんな感じなんで浮気とかじゃないです！」

「そうです！ 風くんとは昔から揶揄いあうのが普通で好きとかそんな気持ちは全くないですから！」

俺としずくが慌てて訂正を入れる。しばらくして目に光が戻ってきた。

「そっかそっかあ、しずくちゃんと風くんは凄く仲がいいんだねえ〜」

よかった。いつものおっとりした近江先輩に戻ってくれた。しずくもこんな近江先輩を初めて見たのだろう。少し脚が震えていた。

「しずくが余計な事するから…」

「んなつ?! 私のせいって言いたいのか!?!」

再びギャーギャー言い争いが始まる。

「むう…しずくちゃんには名前呼びなのに、彼方ちゃんには苗字のままなの？」

むすつとほっぺを膨らませながら聞いてくる。

ほっぺ膨らませる近江さん可愛いなあ。

いやいや違う。頭を振り邪念を追い出す。

「えーと、近江彼方さん…?」

「……」

「彼方さん…?」

ほっぺの膨らみがしぼみ、そして彼方さんはニコツと笑う。

「うんっ♪ 風くん! よくできました♪」

眠ってしまいそうなほど優しい声。

彼方さんがゆっくり近づき、背伸びをして俺の頭を撫でる。その瞬間フワツと柑橘系の甘い香りが鼻の奥を刺激する。不思議だな。なんで女の子ってこんなに匂いがするんだろう。ものすごく落ち着くなあ…。

くくくくくくく

「ちよつと! 彼方先輩もいつまでそうやってるんですか!」

痺れを切らしたしずくの声で急に現実に戻される。

「はっ! ごめんね、風くんが可愛くて撫でるのに夢中になってたよ」

数分の間撫でられていたみたいだ。嘘だ。数十秒しか経っていないはずなんだが?

—————



? Dove ti piace? Come vi chiami, un  
l'altro?」

怖い怖い怖い。恋沙汰になった途端食い付きがすごい。2人とも目がガチだ。ましてや片方はなんて言ってるのかさっぱり分からない。

「…すみません、取り乱しましたね…。コホンツわたしは中須かすみって言いまーす！かすみんって呼んでくださいっ！それで、お名前はなんていうんですか?」

「えーと、蒼山風です。よろしく…。」

「蒼山…?あー!しず子の幼馴染の人?」

「うん」

「そっかあ、なら同じ一年だねっ。よろしくね、なぎお!」

「な、なぎお?」

いきなりのあだ名に困惑する。なぎおって…普通に風って言った方が言いやすいんじゃない?」

「chaouエマ・ヴェルデです!よろしくね!」

今度は三つ編みの子が挨拶を始める。スイス出身で日本のスクールアイドルに憧れを抱き、1人で渡日したらしい。

エマさんの故郷スイスには大自然が広がっており、みんなのびのび過ごしているそう



だ。

通りでエマさんのどこがとは言わないが、のびのびと成長している。ダメだと思いつつも男だからどうしても見えてしまう。一瞬ならバレないよね…？

「彼方ちゃんね〜この2人と今ここにはいないんだけど、天王寺璃奈ちゃんっていう1年生と一緒に4人でユニットも組んでるんだ〜」

「そーなんですよっ！QU4RTZって言うんです！みんな可愛くて魅力的ですよー！まあ？1番かわいなのはこの！かすみんですすけど！

かすみんの魅力で、彼方先輩よりかすみんの虜にしちゃうんですからね！」

ニシシと不敵な笑みを浮かべる。

「は、はあ…」

このとびつきりぶりっ子は養生なのか、はたまた天然なのか。見た感じ悪い子ではなさそうだが…。

「かすみちゃん？」

さっきの不敵な笑みは何処えやら、彼方さんを見るなり急に青ざめた表情になる。

「ひいつ！ごめんさいつ！嘘だからそんなに睨まないでください〜」

そう言うとエマさんの後ろに素早く隠れる。

「めっ！だよく風くんは渡さないからね〜」

そう言うと2人に見せつける様に彼方さんは俺にぎゅーっと抱きついてきた。

その後しばらく4人でたわいもない話をしたのち、俺は彼方さんと帰路につく。

やっと2人の時間ができた嬉しさで、我慢していた俺は彼方さんに一方的に話しかける。

「……」

返事が一向に返ってこない

「あの、彼方さん……？なにか怒ってます……？」

「……ねえ？彼方ちゃんがどうして怒ってるかわかる？」

何か怒らす事をしただろうか。記憶を辿ってみるが何も心当たりが見つからない。

「……いえ、分からないです。」

「さつきエマちゃんのお胸みてたよね？」

「……風くんは彼方ちゃんの胸よりエマちゃんの胸の方がいいの？ねえ？ねえ？」

さつき一瞬見たのがバレていた

低い声から発せられる淡々とした物言いと全身から滲み出る黒いオーラは威圧感を植え付け、謝罪以外許さない雰囲気を作り出す

「ごめんなさいっ！エマさんの見ましたっ！でも一度だけです！信じてくださいっ！」

「知ってるよ？ずーずーと風くん見てたんだもん。もしあと一回でも見てたら彼方ちゃん何してたかわからないなあ」

「ねえっ！」

突然の大きい声にビクツと肩が跳ね上がる。

「風くんは！風くんは彼方ちゃんのものなのっ！」

彼方ちゃんだけ見て、彼方ちゃんのことだけ考えて、彼方ちゃん以外の他の女の子なんて見ないで！」

そう言うのと彼方さんは両手で俺の顔を挟み、有無を言わさず無理矢理キスをしてきた。そしてまるでマーキングするかの様に舌が口の中を蹂躪する。

「んっ——！」

俺は抵抗しようと身を引こうとするが、彼方さんは俺の身体を押し込むように前進し

てくる。

やがて扉に身体が当たり、彼方さんは逃げれまいと、更に貪るような口付けを繰り返す。

執拗に舌を舐め、吸い上げられて呼吸が苦しい。だんだん俺の意識が朦朧としていき、ストーンと途絶えた。

ペロリと自身の唇を舌で舐める。風くん美味しかったなあ♡

「ふふっ♡気絶するほど彼方ちゃんキスが気持ち良かっただね♡」

風くんはちよつとでも目を離れたらすぐ他の女の子に目移りしちゃうんだもん。そんな風くんには、彼方ちゃんしか見えなくなる様にしてあげないとね♡

彼女は恍惚とした表情を浮かべ彼を見つめた

## 第三話

「はあ……」

「どうしたの？喧嘩でもした？」

俺はしずくといつものお店で晩御飯を食べていた。ここ最近はいつも彼方さんが晩御飯を作ってくれていたから、ファストフードの味が懐かしく感じた。

この日は彼方さんの用事があり、晩御飯を作ることが出来ないと言われた。なのでしずくに「いつもの店いく？」とLINEを送ったところ、即既読になり「行く！」と返事が返ってきた。そんなにしずくあの店好きだったのか。

「え？なんでまたいきなり？喧嘩なんてしてないけど……？」

唐突のしずくの質問に困惑する

「いや、だって今溜息ついてたじゃん」

「うそ？今溜息ついてた？」

知らず知らずのうちに溜息が出ていた様だ

「うん。だからなんかあったのかなーって」

「……いや、特に何にもないよ」

「今の間は何よ？聞いてあげるから、ほらさっさと口に出して楽になっちゃえ、ほら、ほら！」

しずくが人差し指で脇腹を突いてくる。

「しつこいよ！彼方さんとは何にもないって！」

「私、彼方さんって一言も言っていないけど？」

ニヤアと嫌な笑顔で笑うしずく

「…」

やられた、まんまと誘導された。このパターン最近多い気がする。

「ほら！観念して、話してごらん？」

「…分かったよ。最近さ、彼方さんといるのがしんどくなってきたんだ。なんていうか、

束縛とか決め事が多くなってさ。」

「私が思ってた内容の斜め上の話だった…」

—————

彼方 side

風くんと付き合って3ヶ月が経った。

最初は純粹に興味から付き合ったものの、日に日に「好き」という気持ちが大きくなっ

た。風くんとお話をして居る時は時計の針の進みがとても早く、隣に居ると心がぼかばかした。そして二人で笑い合う時や、お日様が出て居る時に風くんのお家でまったりお昼寝デートをするのが一番の幸せだった。

風くんが、両親の帰宅が遅いからよくファミレスに行つて居ると聞いた。だから風くんの両親が遅い時は必ずお家に行つて、彼方ちゃん特製の手料理を振る舞つた。

風くんはいつも「美味しい！美味しい！」と言つて食べてくれた。「美味しい」つて言つてくれるのが一番嬉しい言葉なんだよ？

だから彼方ちゃん、もつと風くんに褒められたくていっぱいいっぱい料理のお勉強も頑張つたんだ

風くんの両親には「いい彼女さんね、将来のお嫁さんかしら？」と言われたもんだから、彼方ちゃん、すごく嬉しくて顔が真っ赤になつちやつた。

彼方ちゃんね、風くんとずーつと一緒に幸せで居るための決め事をたつた30個ほど決めただ。

「一つ、同好会以外の子とは話さないこと」

同好会のみんななら、彼方ちゃんの彼氏つて知つてるから風くんに迂闊なことは出来

ないからね

「2つ、女の子と話す時は必ず彼方ちゃんに電話をかけること」

電話が繋がってる状態ならやましいことなんて言えないもんね

「3つ、1日に最低でも1時間はお話すること」

彼方ちゃん、お話ししないと不安になっちゃうんだ

「4つ、休みの日は必ず一緒にいること」

せつかくの休みなんだから1日中イチャイチャしたいもんね

「5つ、可愛い女の子が出るテレビやアニメは見ないこと」

彼方ちゃんがその娘に嫉妬しておかしくなっちゃいそうだから

「6つ、遊ぶ時は誰とどこで何をするか連絡すること」

グループで遊ぶとしても女の子がいたら浮気と同じだからね

「7つ、彼方ちゃんには絶対に嘘はつかない事」

彼方ちゃん、嘘は嫌いだよ。もし破ったら言う事を1つ必ず聞いてもらうからね

まだまだ足したいけど、これでも少ない方だよ

彼方ちゃん、凧くんに甘々だなあ

あーあ、今日は彼方ちゃん特性シチュウを作るつもりだったんだけどなあ。せつかく



美味しく作れる様に何回も練習したのにな。

進路票なんて提出しなくてもいいのに。

そんなの風くんのお嫁さんに決まってるじゃん

学校で進路票の不備を直してたらこんな遅くなっちゃった。風くん何食べてるか？またファミレス行つてたりしてね？そうだ！そろそろ付き合つて3カ月だしプレゼントでも買つて帰ろうかな？

そんな事を考えながら自宅へと足を運ぶ

「ん？あれつてまさか？風くん？」

偶然、帰り道にあるファミレスの方を見ると風くんによく似た横顔が見えた。

ファミレスに近づき、窓を覗いて見る

「わあく風くんだあ〜」

やっぱりそうだった。好きな人はすぐに見つけられる。

「おーい、風くん？」

外から手を振つてみるも気づく様子がない。

そうだ！店にこっそり入ってビックリさせちゃお！

へへへ、どんな顔してくれるかなあ？

ガチャッ

「いらつしやいませ〜」

お店に入る。風くんはどこだ？あ、居た！

そーつとそーつと、バレないように！

おやおや？向かいに座ってるのはしずくちゃんだね。よーし作戦変更！しずくちゃんも一緒に餌食になってもらうのだ〜

〜

「……まあそんな感じなんだ。だから最近あんまり寝れてないし、友達とも遊べてないんだ」

「彼方さんにその事は言ったの？」

「言っただけど、ダメって言われた。世の中の恋人ってこんなに縛られるものなのかなあ？」

彼方さんと居るのは楽しいよ？でもちよつとだけ、冷めてきたんだよな……。こんなのが無かったらもつと好きになってるのに……」

「言ってもダメだったのね……うーん……」

——

——

1

よし、バレないように風くんの席の後ろまで来れたぞ

ふつつつぶ、ビックリするがいい

驚かすまで3秒前!

さん! にい! い: 「それだったら彼方さんと別れるしかないよね」

「……」

今の今まで考えていた事が抜け落ちる。

しづく……ちゃん? 何言っ……てる……の?

別れる？私と風くんが？は？

「こんな事続けてたら風くんの身体が壊れちゃうよ！」

いや、違う。この女が別れる様に誑かしてるんだ。でも、なんで？…：そういえば、私以外で一番この女が風くんと仲がよかった。仲がよすぎて心配することもあつたけど、幼馴染つていうから特別に決まりを許してた。

あの時、もしかしてとは思つてたけど、ふーん、そつかそつかあ。やつぱりね、この女は風くんを狙ってる。

へええええええええ、がっかりだなあつ！お淑やかで健気だった子が、実は人の彼氏を奪うような悪女だったなんてねっ！

今までの行動は全て演技だったつていうわけだ！彼方ちゃん完つ全に騙されたよ

でもね、風くんに手を出す女は彼方ちゃん誰であつても絶対に絶対に許さないからね？